

### 一都市と農山漁村の共生・対流表彰事業一

# 第オーライ! ニッポン大賞



#### 「オーライ! ニッポン」とは

都市と農山漁村の間の"人・もの・情報"の往来(おうらい)を盛んにすることで、日本全国が元気(All right)になることをめざす国民運動「都市と農山漁村の共生・対流」のキャンペーンネームです。

### 第11回 オーライ! ニッポン大賞 講評

都市と農山漁村の共生・対流(以下「共生・対流」という。)に関する優れた取組を表彰するオーライ!ニッポン大賞は、今年度、第11回を迎えることができました。これもひとえに、現場で活動を実践されている皆様のご尽力と、関係7省をはじめ関連団体及び地方自治体等の関係者の皆様の温かいご理解とご支援の賜物であり、この場をお借りして心より敬意と感謝を申し上げます。

今年度は全国からオーライ!ニッポン大賞78件、ライフスタイル賞13件、合計91件のご応募を頂きました。募集の周知にご協力いただいた関係者の皆様に改めて御礼申し上げます。

今年も、全ての応募内容に込められた、取組の発端から成果を上げるまでの「物語」を拝読させていただきました。共生・ 対流の取組みが着実に全国各地に拡がるとともに、質的にも深化していることを実感させていただきました。

活動に取り組む地域、取組主体、連携相手等の多様性を反映し、活動内容のバリエーションも年々、多彩になって参りました。従来から増加していた学校、大学、企業、観光等との連携に加え、医療機関と連携した健康増進の取組み、授産施設と連携した福祉的な取組み、郷土芸能の保存・継承に関する取組み等も増えました。また、子どもたちに地域の自然、産業、歴史、文化等を、体験交流を通じて学ばせ、地域への誇りと愛着を醸成する取組みも増えました。都市側の企業が、都市の抱える課題を中山間地域との交流を通じて解決を目指すという新機軸のコンセプトをもつ取組みもありました。

ライフスタイル賞は、都市部からの移住(U J I ターン)や、都市と農山漁村を行き来する二地域居住等を通じて、個性的で魅力的なライフスタイルを実践しながら共生・対流に貢献している個人を表彰するものです。今年度は、自身も農山漁村で過ごすライフスタイルを楽しみながら、その企画力、実行力、影響力によって地域に変革を及ぼしている方々からの応募が増えました。その多くは、行政の補助金に依存せず、ご自身や地域の力で活動を持続・発展させていこうとする姿勢が強く感じられ、感銘を受けました。

これらの「物語」に関わった全ての関係者の皆様に深い敬意を払いながら選考・協議させていただいた結果、オーライ! ニッポン大賞グランプリ(内閣総理大臣賞)1件、オーライ!ニッポン大賞3件、審査委員会長賞5件、ライフスタイル賞4件の計13件を選定いたしました。

グランプリに輝いた「おうしゅうグリーン・ツーリズム推進協議会」(岩手県奥州市・平泉町)は、農村生活体験型教育旅行の受入を進める組織であり、前身の団体から25年間に及ぶ活動の継続性や、学校側の多様なニーズに応えるために6つの地区協議会の連合体として広域的な受入体制を整備している点等が評価されました。震災により東北地方への教育旅行のキャンセルが相次いだにもかかわらず、震災から2か月後には受入を再開し、長年交流を続けてきた学校からの支援を励みに、安全管理体制の強化や誘致活動等に努めた結果、今年、震災前の受入規模を回復することができました。このことは復興を目指す東北全体の励みになるものと存じます。

その他の受賞者の皆さまに対するコメントは、受賞内容をご紹介する各ページに記載させていただきましたので、そちらをご覧ください。

最後に、受賞者の皆様、並びに惜しくも受賞を逃された皆様に対しまして、これまでの共生・対流に対するご尽力に 感謝申し上げるとともに、ますますのご活躍とご発展を祈念いたしまして講評に代えさせて頂きます。

> 平成25年11月8日 オーライ!ニッポン大賞 審査委員会 会長 安田 喜憲

### 第11回オーライ!ニッポン大賞 受賞者一覧

#### オーライ!ニッポン大賞グランプリ

1 | 岩手県奥州市・平泉町

おうしゅうグリーン・ツーリズム推進協議会

#### オーライ!ニッポン大賞

2 北海道根室市

歯舞地区マリンビジョン協議会

3 山梨県山梨市

農業生産法人 (株)hototo

4 | 宮崎県五ヶ瀬町

NPO 法人五ヶ瀬自然学校

#### オーライ!ニッポン ライフスタイル賞

10- 宮城県塩竈市

三浦 勝治 さん

11- 長野県小谷村

辰巳 和生 さん

12- 山口県山口市

素材 則男 さん

**13** 長崎県五島市

濱口 孝 さん

#### オーライ!ニッポン大賞審査委員会長賞

5 長野県飯山市

NPO 法人信越トレイルクラブ

6 福井県勝山市

小原 ECO プロジェクト

7— 愛知県豊田市

<sup>とょもり</sup> 豊森実行委員会

8 島根県出雲市

端鷺げんきな会

9 高知県四万十市

(一社)西土佐環境・文化センター四万十楽舎



### オーライ! ニッポン大賞グランプリ

# おうしゅうグリーン・ツーリズム推進協議会(岩手県奥州市・平泉町)

### 内閣総理大臣賞



### ■受賞者の概要

**活動年数**:7年(前身組織の活動を含め25年)

**活動日数**:365日

活動エリア:奥州市、平泉町

**登録農家数**:214人

**参加者数**:教育旅行15校1.792人、交流会7校約1.300人

(いずれも2012年度)

#### ■写真の説明

- ・教育旅行の様子。生徒は民泊受入農家と一緒に日常の農村生活を体験する。写真は「よもぎ大福」づくり(左)。
- ・民泊受入農家と生徒の涙の別れ(左下)。
- ・学校訪問と交流会で継続的な交流を実現(中下)。
- ・学校の協力で地元農産物の安全をPRするフェアを開催(右下)

#### ■受賞の内容

本協議会は、農村生活体験型の教育旅行の受入を進める ため、受入体制の整備、体験メニューの企画・普及、情報 発信と誘致などに取り組んでいる。

1988年、旧衣川村の主導で体験型教育旅行の受入を開始。2002年、住民と行政が一体となった協議会組織を設立。2006年、町村単位の受入能力を補完し合うため3地区の協議会の連合体として本協議会を設立。現在は1市1町6地区協議会へと拡大し、400人規模の大規模校の受入が可能となっている。2010年、子ども農山漁村交流プロジェクト受入モデル地域に選定され、受入校の定着と受入年齢層の幅が広がっている。

受入農家は、子どもたちと農作業や食事の支度を一緒に行い、家族そろって食事をしながら会話をし、ときには叱る。喜怒哀楽をともにし、子どもたちが時折見せる真剣なまなざしや優しい笑顔が農家に感動を与え、活動の糧となっている。先生が「このような明るい表情の生徒を見たことが無い」と言うほど、輝くような笑顔を見せる。

継続的な交流とするため、学校訪問と交流会にも力を入れている。宮城県の中学校とは、学校行事の「元服式」への参加をきっかけに、文化祭、収穫祭、PTA行事等にも参加。保護者が「PTA研修」として地域を訪問し、体験フィールドを見学、受入農家と交流している。子どもたちが地域を再訪問したり、生徒の結婚式に農家を招待する等、

家族同然の交流に発展した家族もいる。子どもたちが手が けたお米を収穫後、「おもいで米」として贈り、農家でみ んなと味わったご飯の感動を思い出にしていただいている。

受入数は年々増加し、2010年度には年間22校約3,000人に到達したが、2011年度は東日本大震災の影響でキャンセルが相次ぎ7校約1,000人へと激減した。訪れてくれた学校のうち6校は宮城県の学校で、「違う環境の所へ行って、リフレッシュできる」、「温かい人々との交流や楽しい活動等を通じて元気になれる」と農家に元気を与えた。

もう1校は2003年度から交流を続けている横浜市浦島丘中学校で、5月から8月に日程を変更して実施した。同校は空間放射線量測定値を収集して子どもたちや保護者に丁寧に安全性を説明した。子どもたちは支援物資と励ましの寄せ書きを持参して地域を訪問、受入農家では家族の無事を確認するかのような歓喜に沸き立ち、心温まる交流の輪が広がった。11月には農家が同校を訪問し、地元農産物の安全をPRする農産物フェアを開催した。

翌2012年度は、震災後関西からは初となる大阪体育大学 浪商高等学校が訪問した。同校も2001年度から交流を続け ており、「震災で困っている時だからこそ、行くことで支 援につなげたい」と実施を決めた。

長年交流を続ける学校からの支援を励みに、人材育成、 安全対策、誘致活動等を強化した結果、本年度、震災前の 受入規模を回復することができた。







前身の団体から25年にわたる活動の継続性や、広域的な受入体制の整備等が評価されました。震災から2か月後には体験型教育旅行の受入を再開。長年交流を続けてきた学校からの支援を励みに、安全管理体制の強化や誘致活動等に努めた結果、今年、震災前の受入規模を回復。復興を目指す東北全体の励みになります。

## オーライ! ニッポン大賞

# 歯舞地区マリンビジョン協議会

(北海道根室市)



#### ■受賞者の概要

**活動年数**:8年

**活動日数**:200日 (2012年度)

年間の売上実績:約723万円 (2012年度) 年間の参加者数:約5,000人 (2012年度)

#### ■写真の説明

- ・小学生による地引網体験(左)。
- ・高校生の漁家民泊受入の様子。歯舞産の海の幸を味わう (左下)。
- ・北方領土を間近に望む「本土最東端パノラマクルーズ」 (右下)。

#### ■受賞の内容

水産物の安定供給と水産業および漁業者の健全な発展を 目指し、活力ある水産業や漁村の実現を目的に活動を開始 した。構成員は、漁業者だけでなく様々な関係者(地域住 民、商工、観光、農業、地域環境、人材育成、漁協、水産 流通、行政機関等)41名と地域の青年会を主体としたワー キング・グループ40名の計81名。

地域資源を再確認し、水産業を核とした地域振興方針「地域マリンビジョン」を策定。ビジョンの理念は「漁村の役割は何か?を探求する」こと。"無いものねだり"より"あるもの探し"をモットーに活動を展開している。

①歯舞産水産物のブランド化の推進、②漁民が居住することによる多面的な機能の強化、③地域の衛生・環境問題に積極的に取り組む、④都市・漁村交流の活動を推進し歯舞の良さをアピールする、の4点を基本構想とし、「漁業経営」、「漁村交流」、「地域ブランド」、「衛生環境」の4つの専門部会において具体策を協議・検討して実施している。

交流活動は歯舞の知名度向上の手段として位置付け、修 学旅行生や北方領土に関わる視察団の受入、移住体験ツ アーの実施等を通じて、漁業を身近に体験してもらい、歯 舞産の新鮮な海の幸を味わうことで歯舞の良さを知っても らうよう努力している。

#### (主な活動)

①熊本県・鹿児島県・広島県・岡山県・兵庫県から、北方

領土青少年、全国県民会議の視察団120名を受入、歯舞市場を見学、潮干狩りを体験。(2012年、2013年)

- ②大阪教育大学附属高校天王寺校舎の生徒に、漁家民泊、エビ篭の引き揚げ、潮干狩り等の体験を提供。(2011年9名、2012年23名、2013年12名)
- ③根室市移住体験モニターツアーに参加した首都圏在住者 に、昆布干し作業の体験と、漁協食堂で旬のサンマや北 海シマエビを提供。(2012年7名、2013年6名)
- ④全国各地から集まった連合会員(約700名)に対し歯舞産の魚介類を中心に11品目を提供し、全国に歯舞産水産物の新鮮さをPR。(2007年から毎年9月に継続実施)
- ⑤北方領土問題をテーマに東京都千駄ヶ谷の小学生5人が「こども記者」として、又、滋賀県の中学生19人も北方領土青少年現地視察事業として訪れ、歯舞漁協の遊覧船に乗って間近に北方領土を眺めた他、水産業を基盤とした体験プログラムを通じて、歯舞の魅力をPR。
- ⑥長崎県上五島町漁協との職員同士の人事交流を行い、職員の資質の向上と知識の習得、それらを活かした人材育成を図る。(2007年から継続実施)
- ⑦歯舞中学校生徒が修学旅行先のJR札幌駅構内で「はぼまい昆布しょうゆ」と生徒お手製のチラシを配布して、 地元商品をPR。
- ⑧首都圏を主体とした各種催事に出店し、歯舞ブランド品 の販売促進活動を展開。



漁業者だけでなく、地域住民、商工・観光・農業関係者等、地域の諸団体、関係者が一体となって水産物プランドづくりから環境保全、小中学生の体験学習、都市・漁村交流に取組み、道内はもとより都府県からの視察・体験受入等、幅広い活動を行っている点が評価されました。

### オーライ! ニッポン大賞

# 農業生産法人 株式会社hototo

やまなしけんやまなしし(山梨県山梨市)



#### ■受賞者の概要

活動年数:5年 活動日数:240日

活動エリア:山梨市牧丘町

年間の参加者数:農業実践スクール80人、体験3,200人

#### ■写真の説明

- ・教育農場としての子どもたちの体験(左)。
- ・農業スクールの生徒の皆さん(左下)。
- ・食品メーカー等と連携した親子カレーパーティー(右下)。

#### ■受賞の内容

「ホトト」とは一風変わった社名である。残念なとき、 ため息をつくときに口にしてしまう「トホホ」を反対から 読み、言いやすく「ホトト」にしたという。もっと元気な、 愉しい生活を創造できるようにとの願いを込めている。

代表取締役の水上篤 (みずかみあつし) 氏は、建築や家 具のデザインの仕事でニューヨークに暮らしていた時、「リ トリート」というライフスタイルに遭遇した。週末にビジ ネスマンや大富豪が田舎で過ごし、土いじりに興じ、収穫 に歓声を上げ、様々な立場の人々が農作業を通じてコミュ ニケーションを楽しむ。そんな光景を目の当たりにし、人 間らしい生活や自分にとっての幸せが故郷の風景や農業に あると気づき、2008年、12年ぶりに故郷に戻り、実家のぶ どう栽培を引き継ぎながら週末農業スクールを始めた。

ほ場は、耕作放棄地を家族とスタッフで除草・抜根・整地 した。持続可能な農業を目指して農産物残渣、生ゴミ、生 活排水を微生物で活性化させた液肥や堆肥を多用している。

週末農業コースの対象は、将来農業を始めたい、あるい は都会に住みながら農業もしてみたいと考える都市住民。 年間を春夏コース、秋冬コースに区分し、さらに土曜日ク ラスと日曜日クラスを設け、各コース・クラスとも隔週の 12回かけて、野菜作り等を勉強していく。収穫した野菜 で、昼食づくりや保存食づくりも行える。授業料は1コー ス96,000円、次の時期に継続する場合は40,000円。卒業生 は「ホトトクルー」という組織を参加し、新年会などの交 流プログラムに参加できる。

かつての集落がそうであったように、子供の歓声や大人 の笑い声がスクールから聞こえるようになると、周辺の住 民が覗きに来るようになった。高齢者からは「手伝えるこ とがあれば、何でもするよ」との申し出を頂き、野菜作り や地域情報の講師としての活動をお願いしている。

12回通うのは無理な方でも気軽に参加できる体験コー ス、土日の一泊二日で農業体験が受講できる年間農業ス クール (計12回)、子どもと大人を一組として一泊二日で 参加する宿泊農業体験等、多様なコースを用意。保育園や ファミリーの子ども連れでの参加も多い。大手食品メー カー等と連携した野菜収穫とカレーづくりをセットにした カレーパーティーも毎回好評を博している。

活動開始から5年間で、参加者数は農業体験で延べ 12,000人、スクールは17期で延べ400人を超えた(2013年7 月時点)。本格的な就農を目指して年間農業スクールを受 講し、実際に就農した受講者も15名に達した。

「ホトト」は農から新しい未来の価値を創造する事業を 行うが、「トホホ」にならない事業であれば、積極的にチャ レンジし、社会に貢献していきたいと考えている。新たな 挑戦として、①無加温と無農薬を特徴とする「越冬イチゴ」 (JAS有機認証申請中)の栽培技術の確立、②昨年(2012 年)地区内に開業した、心と体の健康向上を目指したリゾー ト施設「保健農園ホテル フフ山梨」の運営参画(地場産 農産物を利用した食事や農作業体験の提供)、③県内の授 産施設と連携し、ホトトや地域内で生産される果実を用い たタルトの製造・販売、等にも取り組んでいる。



単なる体験だけでない実践的なスクールとなっており、地域の高齢者を講師として活用しながら高単価を 実現する等、コミュニティビジネスの成功例として評価されました。健康や福祉などへの新たな挑戦にも 期待が高まります。

### オーライ! ニッポン大賞

# 特定非営利活動法人 五ヶ瀬自然学校 (宮崎県五ヶ瀬町)



#### ■受賞者の概要

活動年数:8年(前身組織の活動を含め11年)

活動日数:300日

活動エリア:宮崎県五ヶ瀬川流域 年間の売上:約2,800万円 (2012年度) 年間の参加者数:約1万人 (2012年度)

#### ■写真の説明

- ・風の子自然学校では、野菜を無農薬で栽培(左)。
- ・渓流歩きなど地域の豊かな自然を活かしたプログラムを展開 (左下)。
- ・神楽、なぎなた、棒術など郷土芸能を地域の誇りとして継承(中下)。
- ・キット型ログハウス等、コミュニティビジネスの創造にも取り組む (右下)。

#### ■受賞の内容

将来、子どもとともに五ヶ瀬町に暮らし続けていくためには、子ども達を地域の力で健全に育成し、故郷の自然や人の良さを深く心に刻み、子ども達に「帰って来い」と言える仕事をつくることが重要と考え、お金ではない豊かさを日々実感し、自然に生かされ、人に支えられている事をしっかりと理解しながら、出来ることから実践。

最初に子ども達の健全育成に取り組んだ事で、住民の信頼を得ることができたという。五ヶ瀬自然学校の卒業生が五ヶ瀬町に戻り、活動を引き継ぐことが将来の夢である。 具体的な活動内容は次のとおり。

- ①文部科学省·放課後子ども教室推進事業 2005年から地元の小学生を対象に年間250日程度実施。 指導者には法人スタッフの他、地域の住民も活躍。
- ②五ヶ瀬風の子自然学校 地元の小学校6年生を中心とするエコスクール。週1回 の子ども会議で、自ら活動内容を考え、報告する。野菜

のすども会議で、自ら活動内谷を考え、報告する。 野采 やお米の無農薬栽培、郷土芸能(臼太鼓踊り)の練習・ 披露、下校時のゴミ拾い等。

③「山の自然学校」やまぶし探検隊

五ヶ瀬町の四季の豊かな自然を子ども達の心に刻むため、様々な子どもキャンプを実施。大人向けの「6泊7日ログハウススクール」も。年間に計30回程度実施。

④清流小川カヌーでゴミ拾いキャンプ

五ヶ瀬川水系北川の支流小川で毎年4回程度開催。時速 1kmのカヌーツアー。1歳児から70代のお年寄りまで 幅広い年齢層が参加できる。知的障害をもつ方を対象と する「バリアフリーカヌー」の教室も年1回開催。

⑤コミュニティビジネスの展開

農業林業に付加価値を付ける活動。ミネラル分豊富な水と寒暖の差の激しい気温で作られた当地のお米を「四億年の大地」のブランド名で販売(町内から九州最古の4億年前の化石が産することにちなむ)。地元土建業と連携してパプリカとピーマンのハウス栽培に着手。地元杉材を活用したキット型ログハウスを開発し、年間2棟程度を販売。地元産品をインターネットショップやイベント等で販売。

⑥空き家の活用

ホームページで空き家情報を発信。九州の大学生と連携 し、お試し体験住宅や合宿所としての活用を開始。

⑦鞍岡地域づくり協議会の活動

鞍岡(くらおか)地区の公民館、高齢者クラブ、婦人会、青年部、神社、小・中学校、保育園との協働で、「子ども達が帰れる場所」を作る活動を展開。伝統芸能とお祭りの継承、空き農地の活用、彼岸花祭りの開催など。中学生が修学旅行で東京を訪問する際に、都内の商店街で五ヶ瀬町をPR。特産品の販売はもちろん、伝統芸能のなぎなたと棒術を披露、自分達が作ったパンフレットを配布。

(8) 五ヶ瀬山学校推進協議会の活動

町内で農家民泊(現在13軒が稼働)に取り組む「夕日の里づくり推進会議」と連携し、町、観光協会、その他の関係団体や個人を巻き込み、教育旅行の誘致に取り組む。また、外務省の国際交流事業の一環として、インドネシア、マレーシア、インドの高校生を受け入れ。







地域の行政、高齢者、若者等、様々な関係者を巻き込みながら、地域の豊かな自然環境や伝統文化を活用した多彩なプログラムを用意し、子供から高齢者まで幅広く受け入れている点が評価されました。また、地元の子どもたちに誇りと愛着を醸成し、仕事を創り出す活動を実践していることも評価されました。

# 特定非営利活動法人信越トレイルクラブ(長野県飯山市)



#### ■受賞の内容

長野と新潟の県境に連なる標高1,000m程度の関田(せきだ) 山脈。かつては人間と自然が共存した豊な森林環境を有す る里山であったが、時代の変化とともに人と山の関係は希 薄となり、山も荒廃。かつては16もの峠道を有し、信濃と 越後を結ぶ交通の要衝として人々が往来したが、交通網の 発展により峠道は使用されなくなり、存在自体が忘れ去ら れようとしている。当クラブは、この山脈に全長80kmに及 ぶトレッキングルートを整備し、古道を復元することで、 新たな観光資源とするとともに、失われつつある地域の財 産を住民が再評価して次世代に継承したいと考えている。

トレイルの整備は、地元や都市からボランティアを募り、 自然環境に配慮しながら実施してきた。全線開通までに、 延べ2,000人以上が整備に参加した。また、地域の財産と も言える自然、歴史、文化に対する住民の理解と愛着を醸 成するため、住民参加型の自然環境調査や、教育機関・企 業へのガイド派遣により自然環境教育を進めている。

2県8市町村にまたがる広域的な活動でありながら、行政、 企業、NPO団体などと連携しながら、共通の理念の下に 活動を推進していく体制を構築。自然環境への負荷を考慮 し、検討委員会でガイドラインやルールを策定、利用者に 向けて発信している。これまでの山頂を目指す登山スタイ ルとは違い、地域の資源や人に触れ、自然を愛でながらの



#### ■受賞者の概要

活動年数:9年(前身組織の活動を含め12年)

活動エリア:長野県飯山市、中野市、栄村、信濃町、

新潟県妙高市、上越市、十日町市、津南町

活動拠点施設:ビジターセンター なべくら高原・森の家 年間の参加者数:トレイル整備参加人数342人、登録ガイ

ド派遣人数113人、年間利用者数(推計)

33,000人 (いずれも2012年度)

#### ■写真の説明

- ・学校・企業の自然環境教育にも活用されている (左)。
- ・地元・都市からのボランティアによるトレイル整備(左下)。
- ・住民参加型の自然環境調査を実施(右下)。

んびり歩くトレッキングスタイルを提唱している。

活動の効果として、地域資源が再評価され、2地区で古 道が復元され、十日町市では自治体と住民の協働により遊 歩道が整備され、飯山市では自然環境の保全と活用を目的 とした3つの住民組織が発足した。

全国でも、初の本格的なロングトレイルとして注目され、 利用者は年々増加。地域内外からトレッキングツアーが催 行され、2012年は年間33,000人(推計)が訪れている。

地域の自然、歴史、文化に詳しいガイドを登録し(現在 約40名)、2012年は延べ113人のガイドを派遣、延べ1.446 人の利用者を案内した。また、最寄駅とトレッキングの起 点・終点との間を円滑に移動できるようタクシー等の交通 事業者と連携。マイカー利用者のために運転代行業者と連 携して回送サービスを構築。さらに、トレイルの理念に賛 同し、トレイル整備への参加と利用者への情報提供を行う 宿を加盟宿として登録している。

昨年6月には、全線6か所にテントサイトを開設し、テン ト泊で縦走が可能となり、今後、学生など若者や団体の利 用増が見込まれる。

トレイルを整備したことにより地域の財産が再び認めら れ、都市から周辺地域への往来が生まれ、里山を保全しな がら活用していく動きと、この地域の財産を次世代に残し ていく活動が上手くまわりはじめている。



旧道・古道の復元とロングトレイルの整備をボランティア活動で行い、それにより地域の連携、地域資源 の再認識、自然の保全、さらにはトレイルを訪れる人々との交流が深められる点が評価されました。数年 で倍増しているといわれるロングトレイルは、新しい形の交流事業として注目されています。

# 小原ECOプロジェクト

(福井県勝山市)



#### ■受賞の内容

白山の豪雪地帯に位置する勝山市小原地区は、かつては 林業や養蚕などが盛んに行われ、明治期には500人以上の 人口があったが、現在、人が住む民家は2戸と廃村の危機 に直面している。2006年の豪雪で、地区の多くの民家が半 倒壊した。同年、小原の再生をめざし、集落関係者、小 原生産森林組合、福井工業大学(吉田純一教授)らが小原 ECOプロジェクトを設立した。

小原には江戸時代末期以降からの伝統的古民家が残っている。その建築様式は独特だ。柱ごと厚く塗りこめた土壁をもつ「大壁づくり」は、寒さ対策といわれる。2階のベランダ状の部分には、物干しざおのように腕木(ウデギ)が施され、山に囲まれて日照時間が短い小原の貴重な乾燥場とされている。石川県白山麓の建築様式に似ており、福井県内では小原地区にのみ見られるという。

勝山市の歴史的建造物調査の一環で当集落を訪問していた吉田教授の協力を得て、学生らの実習をかねて古民家の修復活動が始まった。これまでに、6棟の古民家を修復し、新たに休憩所 1 棟を整備し、交流活動に活用。古民家の1棟は農家民宿として整備(2012年度の宿泊者数は607人)。学生たちは夏の約1ヶ月近くを小原で過ごし、建築技術を習得しつつ、自主的に特産市や伝統文化の保全などに協力。人としての成長や社会性が育まれている。

修復した古民家を拠点に、地域資源を活かしてエコツアーを実施。植林や間伐などの林業体験、山菜取りやキノコ菌打ち体験、炭焼き体験、雪かきやかんじきトレッキングな

#### ■受賞者の概要

活動年数:7年(前身組織の活動を含め8年) 活動拠点施設:農家民宿フクジュ荘など、

修復・再生した古民家6棟

**活動エリア**:福井県勝山市北谷町小原 **参加者数**:1,223人 (2012年)

### ■写真の説明

- ・豪雪体験などの田舎暮らし体験(左)。
- ・6棟の古民家を修復し、農家民宿等として再生 (左下は修復作業の様子、中下は修復後の古民家)。
- ・絶滅危惧種ミチノクフクジュソウの観察会。保全活動も。(右下)

どの豪雪体験、山菜や地元食材(堅豆腐、野菜、そば、お茶など)を使った料理、シシ鍋など郷土料理の提供、古道や旧跡などを紹介するガイドツアー等、多彩なメニューを用意。2012年度は89人が参加。国内外で活動するNGOやNPO法人と連携し、外国人を含めたボランティアを受け入れ、雪かきや稲刈りなどの地域貢献活動も実施している。

近年、白山山系の赤兎山・大長山への入山者が増加し、森林・登山道の荒廃、私有地での森林資源の不法採取、ゴミ等の不法投棄などが問題となった。このため、入山者から協力金(大人300円、小学生以下100円)を徴収し、登山道の整備と維持管理、自然保護活動などを行っている。入山者の利用の便と環境保全を目的に整備された「小原星の駅」の維持管理を担い、施設内に当会の活動を紹介する写真等を展示している。施設の電源の一部は、自ら設置した小水力発電でまかない、環境教育に活用。なお、施設のデザインや名称等にも、福井工業大学が協力している。

北谷町内に自生するミチノクフクジュソウは標高500m 前後の田畑の畦畔部などに生育する春植物。近年は、田畑の管理放棄や園芸採取などにより激減している。地元小学校の5・6年生が環境学習の一環として保全活動に取組み、当会が草刈に協力している。また、県やボランティアとともに、子ども向けの観察会を実施している。

今後も、地域特産品の加工販売、地産地消の食の提供、 民芸品の制作体験・技術伝承・販売、小水力発電など再生 可能エネルギーの導入等、環境に優しい地域づくりをさら に進めたいと考えている。







廃村の危機に迫られた小原地区で、福井工業大学の学生との協働により古民家を修復・再生し、交流活動の拠点として活用するほか、エコツアー、絶滅危惧植物の保全、小水力発電、登山道整備など、環境に優しい地域づくりを進めている点が評価されました。

# とは、もり じっこう い いん かい 豊 本 実 行 委員会 (豊田市・トヨタ自動車・NPO法人地域の未来・志援センター) (愛知県豊田市)



#### ■受賞の内容

豊森は、行政、企業、NPO法人の三者協働による、農山村を起点とした人材育成のプロジェクトである。

プロジェクトの狙いは三者三様だ。日本有数の工業都市として知られる豊田市は、2005年の周辺6町村との広域合併により市域の約7割を森林が占める「森林都市」となり、中山間地域の過疎化・高齢化への対策が求められた。トヨタ自動車は、グローバル化や世界経済の不安定化に対する雇用の流動性や従業員のライフスタイル、価値観の多様化への対応を必要とした。環境活動を支援・実践してきた「地域の未来・志援センター」は、中山間地域の過疎化に伴う生態系の変化、特に生物多様性の減少を食い止め、復元を目指すというミッションをもっていた。

この三者は、中山間地域の課題を解決するためには、農山村やそこで暮らす人々の生活に触れながら、地域の自然資源を活用した新たな事業や暮らしを創出する人材の育成が必要との認識で一致し、実行委員会を立ち上げ、2009年5月に人材育成講座「豊森なりわい塾」を開講した。

なりわい塾は、「山里で自然の恵みに根ざしたなりわいで生きていきたい」、「まちに暮らしながら、山里とのつながりの中で生きていきたい」という思いを持つ受講生を広く公募。第一期(2009年~2010年)、第二期(2011年~2013年)を経て、現在は第三期(2013年~2014年)の受講生24名が、豊田市の中山間地域である「旭地区」を中心



#### ■受賞者の概要

**活動年数**:5年

年間の活動日数:19日 (第三期)

活動エリア:愛知県豊田市(2011年以降は、豊田市の中

山間地域である旭地区を中心に活動)

年間の参加者数:80人(第一期~第三期の累計)

#### ■写真の説明

- ・中山間地域の自然資源を活用した新たな事業や暮らしを 創出する人材を育成する「豊森なりわい塾」を開講(左)。
- ・なりわい塾は、お年寄りへの聞き書き(左下)、フィールドワーク(右下)等を通じて地域と真剣に向き合いながら学ぶ。

に、原則毎月第3土日の2日間、座学とフィールドワークを 組み合わせた講座を受講し、以下の3つの「力」を身に付 けることをめざしている。

- ①暮らしをつくる力(山里の人たちとの交流を通して、自 然の恵みを生かした暮らしを創る力)
- ②なりわいを構想する力(地域の課題を把握し、その解決をめざして、新たなコミュニティ・ビジネスを創出する力)
- ③地域を支える力(山里のコミュニティ活動を通して、地域を支えていく力)

「地域に入って課題を掘り起し、地域に寄り添って解決をめざす」との考えから、第二期以降は、活動フィールドを旭地区に絞り、フィールドワークや聞き書き実習を通じて地域を知り、地域と真剣に向き合うことが学べるカリキュラムとしている。

修了者の中には、実際に山里に移住して地域材を活用した家具を製作する工房を立ち上げたり、郷里にUターンして生産者と消費者の顔の見える低温殺菌牛乳の開発・販売を始める等、農山村での新たな生き方を選択する人々も現れた。

中山間地域の課題を都市側から一方的に解決していこう とする従来の動きとは逆に、都市や都市住民が抱える課題 を、中山間地域との交流を通じて緩やかに解決していきた いと考えている。



行政、企業、NPOが協働で取り組むモデル事例。都市が抱える問題を中山間地域との交流を通じて緩やかに解決していくという基本コンセプトが新鮮で、今後の都市と農山漁村の関係に新たな視点を提示するものとして評価されました。

# 鵜鷺げんきな会

(島根県出雲市)



#### ■受賞者の概要

**活動年数**:8年

年間の活動日数:約300日

活動拠点施設: 鵜鷺コミュニティセンター (出雲市大社町鵜鷺

地区)

年間の参加者数:1.592人 (2012年度) 年間の売上額:363万円 (2012年度)

#### ■写真の説明

- ・田舎ツーリズムは鵜鷺の自然や人と出会う旅。リピーターも多い(左)。
- ・空き家を活かしたミニコンサート。空き家活用は住民を根気強 く説得し、理解を得ながら進めた。 (左下)。
- ・塩づくりはコミュニティビジネスの収益源。体験もできる。(右下)。

#### ■受賞の内容

当会は、人口約240人、高齢化率約60%の鵜鷺地区の再生に向け、2005年に地元住民有志らが設立。かつて銅山や北前船の寄港地として賑わい、1950年頃には1700人以上が暮らしていたが、銅山の閉山等により人口が減少、空き家も地区内家屋の半数にあたる約120軒まで増加した。

空き家活用は、当初、町内会などが消極的だったが、戸別訪問や手紙などで所有者らを根気強く説得し、少しずつ理解を広げた。現在、11軒の空き家が同会などによる借り上げと改修などで再生され、旅行者らの宿泊施設やカフェ、ギャラリー、Iターン者の住居などに活用されている。元郵便局舎を活用した「カフェうさぎ」は、地域産のアラメやワカメ、藻塩、魚、野菜などを使った定食等をメニュー化。古民家ギャラリー「しわく屋」は、県内のクリエーターの木工品や水彩画などを展示・販売。地域の高齢者も気軽に立ち寄れる憩いの場となり、閉じこもり予防や健康維持の効果も。

田舎ツーリズム事業は、なまこ壁とこて絵が見られる民家などの古い町並みを残す路地の散策、海辺での磯遊覧(漁船クルージング)、海ホタル(夜光虫)鑑賞など多彩な体験プログラムを用意。参加者は年間延べ約800人、宿泊者は延べ719人。他県からの教育旅行も増え、東京や京都の高校生、京都の大学生、さらには韓国の大学生や教員らの視察や、福島から夏休み期間中

の生徒たちも受け入れている。

塩づくりは、沖合1km付近・水深5m程度の海中から海水をくみ上げ、平釜で薪を燃やして天然塩をつくる。アラメのエキスが入り、塩分濃度が80%程度(残り20%分はミネラル分等)と低く、まろやかな味と好評。塩づくり体験を含め年間約150万円の安定的な収益源に。Iターンの若い女性が、女性向けパッケージや、満月の日にくみ上げた海水で新商品を開発する等、付加価値を高める試みも。

昨年から、松枯れや鹿の食害が広がる山の一部を開墾し、柿や栗の木を植栽。付加価値を高める為、手づくりで干柿乾燥機を開発。観光農園に取組み収益源に育てる構想も。

まちづくり講座の「うさぎ楽校」を、昨年7月から11月にかけて全5回開催。県内外から約30人が参加し、鵜鷺のまちづくりの歴史や伝統的な食文化等を学び、地域の魅力や体験メニューなどを紹介する冊子「うさぎじかん」を編集・発行した(約6,000部)。その後、受講生が鵜鷺地区の伝統行事である「しゃぎり」にボランティア参加したり、カフェイベントを開催して150人以上の参加を集めるなど、発展的な活動を生み出す効果も現れている。

豊かな自然、人情、まちづくりの意欲、人を受け入れる姿勢が外部の若者の心を惹きつけ、U・Iターンの動きが加速化。過去4年間でIターン者は7家族16人、Uターン者は3家族5人となった。





人口240人(ピーク時の15%弱)、高齢化率約60%の過疎地域が、住民らを根気よく説得して空き家を体験宿泊施設やカフェ等に活用し、外部人材を巻き込みながら田舎ツーリズム、イベント、まちづくり講座などに取組み、4年間で21人のUIターンの移住者を確保した点等が評価されました。

# 一般社団法人 西土佐環境・文化センター四万十楽舎 (高知県西芳丰市)



#### ■受賞の内容

四万十楽舎は、1999年に廃校となった旧・中半(なかば) 小学校の校舎を改修して整備した宿泊体験施設。当法人は、 この施設を環境学習と文化表現活動を中心とする生涯学習 の研修センターとして活用し、四万十川流域の環境・文化 の保全・継承・発展を図るとともに、都市と農山村の観光 交流を中心とする産業振興を目的に活動している。

補助金に依存しない組織運営が特徴だ。四万十市教育委員会から施設(廃校舎)の指定管理を受けているが、それに伴う補助金は一切受けていない。宿泊事業と自然体験事業から得られた収益を公益事業の原資に充てており、その他の補助金や助成金は補足的な事業と位置づけている。

利用者の多くはファミリーで、とくに東京、大阪、兵庫など遠方の大都市からの利用が圧倒的に多い。このため、ホームページやフェイスブックなどネットを使った情報発信に力を注いでいる。

ツアーやイベントにも力を入れている。横浜の子どもたちを対象にした「子どもキャンプ」は、夏休みの5泊6日間で四万十川を堪能するプログラム。毎回15~20名の参加があり、リピーターも増えている。高知市の子どもたちにも、類似のプログラムを春休みと夏休みに3泊4日で実施し、人気が高く定員を超過してしまうので、同じプログラムを2回開催することも。

四万十川の魅力を源流から河口まで体感できる大人向



#### ■受賞者の概要

**活動年数**:15年

**年間の活動日数**:310日

活動拠点施設:四万十楽舎(小学校の廃校舎を活用した

体験宿泊施設)

年間の参加人数:3,500人 (2012年度) 年間の売上額:3,030万円 (2012年度)

#### ■写真の説明

- ・四万十川のカヌーツーリングは人気メニューの一つ(左)。
- ・「ドラゴンラン」は、四万十川の源流から河口までの 196kmを徒歩、自転車、カヌーで踏破するツアー(左下)。
- ・子どもだけで四万十川の大自然に触れる子どもキャンプ (右下)。

けのエコツアー「ドラゴンラン」も好評だ。全長196kmの四万十川は、蛇行を繰り返しているので、上空から俯瞰して見るとあたかも竜のように見える。源流から徒歩、自転車、カヌーを組み合わせ、人力だけで河口を目指す。期間は本流なら5泊6日、支流は4泊5日。途中で立ち寄る地域には、それぞれ特色ある文化があり、それを紐解きながらの旅となる。ゴールの太平洋に到着した達成感は、参加者に大きな感動を与える。参加者の中からは、林業関係の仕事に就きたいという林業女子や、大学卒業後に他の自然学校に就職した若者等、四万十流域への移住者も現れた。

教育旅行にも取り組んでいる。神奈川県内にある私立の中学・高等学校は、10年にわたって継続的に受入を実施。より高い教育効果が得られるよう、外部の関係者と連携して受入体制を充実させている。森林保全など「山のプログラム」は、四国森林管理局の四万十川森林環境保全ふれあいセンターや林業経験豊富な地元の高齢者の協力を得ている。カヌー体験など「川のプログラム」は、県立中村高校西土佐分校のカヌー部の部員をガイド・インストラクターとして迎え、同世代の交流にも役立てている。講話の時間には、法人スタッフが自らの I ターン経験談を披露し、卒業後の生き方を考えさせる時間としている。

一般社団法人に移行した今年を新たなスタートと位置づけ、利用者の満足度向上を目標に、更に前進していきたいと考えている。



廃校を活用した交流事業でありながら施設の指定管理に伴う補助金を一切受けない組織運営、川・山・生き物・食・林業などを活かした多彩な体験プログラム、15年間にわたる活動の継続性等が評価されました。 人の力だけで全長196kmの四万十川を踏破するエコツアーも独創的な企画です。

### 夢を諦めない。頑固親爺! 三浦 勝治 さん (68才) (宮城県塩竈市)



#### ■受賞者と農山漁村との関わり

【農山漁村へ移住】(移住後3年)

観光で訪れた浦戸諸島の桂島が気に入り、「島のために自 分にできることをやろう」と決意して仙台から移住。

【地域での実践活動】(4年)

震災で、島の貴重な観光資源である海水浴場が失われ、隣の浜に新たな海水浴場を開設し、その利益を地域へ還元。 「幸せの黄色い花と笑顔が咲き乱れる『ふるさと愛ランド』 の実現をめざして活動している。

#### ■写真の説明

- ・ボランティアの支援を受けて海水浴場を開設(左、左下)。
- ・瀬戸内の離島から贈られたスイセンの球根を植栽(右下)。

#### ■受賞の内容

かつて、島のいたる所に菜の花が植えられていたと聞き、青い海原を背景に黄色い菜の花が咲き乱れる島の姿を思い描いた。2009年11月、知人や友人に声をかけて市民団体「元気な浦戸諸島を共創する会」を設立。ボランティアと島民の協力を得て、黄色い実の食用ホオズキの栽培と加工品作りを開始。2011年1月、桂島へ移住。食用ホオズキと浦戸でとれる米のオーナー制度を企画し、会員募集を終えた矢先、震災に遭遇した。

桂島では83軒のうち36軒が全壊などの大きな被害を受けた。主産業の海苔・牡蠣の養殖施設も壊滅な被害を受け、島に2軒あった小売店も被災を受け廃業。地域の社会と経済の循環が失われた。震災4日後からホームページ、ブログ、メールなどを使い、全国から救援物資を集め、船外機を付けた小さなボートを使い、3日に1度くらいの頻度で浦戸諸島へ物資を届けた。復興支援の本格化のため、一般社団法人浦戸夢の愛ランドを設立し、代表理事となった。

震災で島の貴重な観光資源「桂島海水浴場」は失われた。 復興には観光客を呼び込む必要がある。海水浴場の東側に ある「鬼ヶ浜」は、沖合に波防ブロックが積まれた遠浅の 砂浜だ。この浜を海水浴場にしたいと考えたが、アクセス する道がなかった。そこで2012年5月、「鬼ヶ浜マイビーチ クリーン大作戦」と銘打ち、ボランティアを募集し、周辺の竹藪などの刈り込み、砂浜に打ち上げられた船・タイヤ・流木などの撤去・清掃、ダイバーを投入して海底のガレキなどを片づけた。トイレ、シャワー、脱衣所、休憩所などの施設を整備し、今年2013年の夏、海水浴場としてオープンした。約4,300人の海水浴客で賑わい、売り上げはほぼ全て雇用等の形で地元に還元した。

島は牡蠣の養殖が盛んだが、今までは殻をむいて外へ出荷していた。鬼ヶ浜の休憩所を利用して、殻つきの新鮮な牡蠣を食べられる店を今年の冬から開店させる。来島者が気軽にいつでも「帰省」したいと思える新しい交流・ツーリズムを実現したいと考えている。

三浦さんの活動と実績は、島民の心を動かした。漁協の 運営委員長から島おこしの組織を作りたいと相談を受け、 事務局を引き受けることに。島民と外部関係者が協働して 島おこしに取り組む「桂島・石浜楽しみ隊」だ。漁協、自 治会(区)、女性部も参加する。

園芸家の柳生真吾さんの協力で瀬戸内海の男木島からスイセンの球根15,000球が贈られ桂島に植栽した。来年2014年の春には9年ぶりに「菜の花祭り」を復活させる。黄色い花が咲き乱れる夢の愛ランド・・・外からやって来た一人の頑固親爺の夢が、島ぐるみの夢として実現する日は近い。





経済効果と雇用を創出させることを視野に入れた活動で、よそ者としての自覚を持ったうえでの企画力、 行動力、粘り強さは、個人のライフスタイルを超え、他の模範になると評価されました。

# 古民家ゲストハウス梢乃雪宿主 辰 巴 和 生 さん (27才) (長野県小谷村)



#### ■受賞の内容

築150年の古民家で、父親、従業員、居候と暮らしながら、家をゲストハウスとして運営し、畑や田んぼ、薪の確保、草刈り雪かき、集落仕事といった田舎生活を送りつつ、音楽活動やイベントの開催、宿と村に関する情報発信等、田舎という空間や特徴を生かした活動を行っている。

生まれと育ちは大阪の住宅地だが、小学4年生から6年生までの期間を山村留学のため小谷村で過ごした。大学卒業と就職を間近に控えた2009年1月、父親が突然、「春に定年を迎えたら小谷村に移住する。」と宣言し、「家はある。お前も来い。」と誘われた。突然の話に戸惑いもあったが、村への想いも強く、同年3月に父とともに移住した。

最初の1年間は移住先の古民家の片づけと改修に費やし、 翌2010年に村役場の一般職員として就村。翌年、役場有志 による「空き家利活用プロジェクト」に参加し、移住経験 を活かして「小谷村移住ガイド」を作成した。

2012年、プロジェクトを具体化させる形で役場内に地域おこし専門部署の「特産推進室」が設置され、そのスタッフになるために役場を退職し、嘱託職員(集落支援員)となった。北小谷南部地域の地域仕事や広報・イベント企画に携わるとともに、村長から婚活事業の担当を命じられ、村内有志を募って「小谷ど田舎コン実行員会」を設立。アウトドアや山が好きな男女を対象にした「山コン」、スポー

#### ■受賞者と農山漁村との関わり

【農山漁村へ移住】(移住後4年)

小学4年生から6年生にかけて山村留学で暮らした小谷村 に、定年退職を迎えた父親とともに移住。

【地域での実践活動】(5年)

築150年の古民家を改修したゲストハウスを拠点に都市住 民等との交流を行っている。

#### ■写真の説明

- ・地元のじいちゃんの田んぼで田植イベント (左)。
- ・チェンソーで木を切る辰巳さん(下段左から1枚目)。
- ・荒廃していく集落(下段左から2枚目)。
- ・古民家ゲストハウスでの滞在のスナップ(下段右側2枚)。

ツ雪合戦やスノーシューハイクを楽しむ「雪遊びコン」、トレッキングとバーベキューを組み合わせた「トレQ」等のイベントを成功させ、多くのマスコミに取り上げられた。

ゲストハウスは山村留学OB生が集える家、田舎への憧れをもつ人が集える家として活用している。「小谷杜氏と酒で語る会」、「地元のじいちゃんの田んぼで田植イベント」、「七夕合コン」などのイベントも数多く実施している。

これまでは「いかに地域に溶け込むか」を課題にしてきた。道普請や集会、消防団、各種行事への参加はもちろん、ご近所の草刈りや困りごとのお手伝い、管理出来なくなった田んぽを借りて米づくりをしている。

移住から4年が経ち、新たな課題を自らに課した。仕事が少ないこの村で、自分自身で創り上げる収入のみで生計を立てること。楽しいことの連鎖から生まれる収益で暮らし、その収益をいかに地域に還元するか。将来的には、行政に頼らない地域づくりの実践が目標だ。

辰巳さんが通った小学校は、高校生になる頃、統廃合によって閉校した。20年余、400名程の子供たちを受け入れた山村留学も同時に休止となった。山村留学の発起人である所長も亡くなった。このままでは、小谷村も無くってしまうのではないか。このふるさとを残したいという思いで、交流活動に取り組んでいる。









かつて山村留学で過ごした過疎化の進んだ村に移住し、役場職員としての経験を積み、着実に地域に溶け込みながら、「楽しみながら働く」という自分のライフスタイルを実践し、それが無理のない形で地域活性化につながる生き方となっている点が、これからの若者のライフスタイルのモデルとして評価されました。

### 郷山体験コンシェルジュ 嘉 村 則 男 さん (56才) (計算計算)



#### ■受賞者と農山漁村との関わり

【農山漁村へ移住】(移住後21年)

Uターンしてサラリーマンをしながら生家の農業を営む。 【地域での実践活動】(20年)

人口200人あまり、高齢化率65%超の山口市仁保上郷(にほかみごう)大富(おおとみ)地区で、栽培体験や自然体験などの体験プログラムを都市住民に提供している。

#### ■写真の説明

- ・体験圃場や交流ハウスは自己資金で整備した(左)。
- ・体験指導者には地元の高齢者などの協力が欠かせない (左下)。
- ・子どもを重視、乳幼児を連れた親子連れの体験も(右下)。

#### ■受賞の内容

平成5年、畜産関係の技術者の仕事を退職してUターン し、サラリーマンをしながら生家の稲作を中心とした農業 を開始。この年の大冷害を契機に異常気象に負けない有機 農業に関心を持ち、翌年から合鴨農法を取り入れた。

合鴨を放した水田には、地元の子ども達、学校の先生、 保護者らが訪れるようになり、秋には米と合鴨の試食会を 行った。この間、彼らの意識が「見たい」、「触りたい」、 そして「食べてみたい」へと次第に変化し、食の大切さや、 生き物への感謝の気持ちなどが育まれたことに気づいた。 農業と農村が、人が集まるコミュニティーの形成、人間教 育、癒し、観光、自然保護など、いわゆる多面的機能をも つことを、身をもって実感できた。この体験が交流事業開 始のきっかけとなった。

仲間とともに任意団体「里山環境プロジェクト」を立ち上げ、各種の勉強会や講習会に参加、グリーン・ツーリズムインストラクターやコーディネーターの認定を受けた。自己資金で整備した体験圃場や交流ハウスを「クラインガルテン大富・農家楽(のうからく)」と名づけ、2011年に団体をNPO法人やまぐち里山環境プロジェクトに改組。現在もサラリーマン生活を続けながらNPOの代表として10名のスタッフとともに、週末を中心に年間50回程度の体験プログラムを実施、自らも楽しんでいる。

体験プログラムは次の3つの柱で構成。①野菜の栽培体験を中心にした「野菜倶楽部」、②地域の伝統野菜やブランド野菜を加工する「漬物倶楽部」、③子ども達に「農」や「食」、「里山」の体験活動を提供する「郷山こども倶楽部」。

これらを実施する際は、必ず高齢者など地元農家に体験 指導者として参加してもらっている。また、体験の参加者 には、地域のお祭りにも参加してもらうなど、地域との関 係を持つように心掛けている。参加者から定住者も現れた。

地域の多様な主体との連携も心がけている。市街地の幼稚園や商店街組合と連携して園庭や街中に田圃を整備、市内の子育て支援施設と連携して里山体験活動を定期的に実施、地元の行政機関や大学、団体の研修の受入など。

現在、年間で約1,000名の体験希望者を受け入れており、受入能力の限界を感じている。周りの農家や農業法人等にも受入を打診するが、高齢化や獣害による生産意欲の低下もあり、「めんどくさい」、「厄介」といった意識が払拭できない。そこで、今年度から地域全体でマルシェと音楽祭を開催し、地域に潤いや癒しを届けながら、交流の必要性とメリットを周りの農家に対して発信し始めた。

「まち」と「むら」の往来により、農業や農村がもつ力をたくさんの人と発見、共有し、子どもたちに伝えることによって、日本はいつまでも豊かで美しい国であり続けることができると信じている。





自己資金で圃場や施設を整備する自主性、年間1,000人の体験を受け入れる実践力、20年にわたる活動の継続性と実績、農業・農村の多面的機能の発揮を等身大の活動の中で実践し、子どもたちに農業・農村のもつ力を伝えようとする姿勢等が評価されました。

### 生涯現役・里山市民 濱 口 孝 さん (60才)

なが さき けん ご とう し (長崎県五島市)



#### ■受賞者と農山漁村との関わり

【農山漁村へ移住】(移住後8年)

田舎暮らしのスクールを開校したいと考え、五島列島の福 江島北端の半泊(はんどまり)集落に移住。半泊の人口は 「5世帯9人、犬3匹、山羊1頭」。

【地域での実践活動】(8年)

廃校を簡易宿所、カフェ、住居を兼ねたビジターセンター に改修し、年間1,000人(2012年)の交流人口を受け入れ。

#### ■写真の説明

- ・濱口さんご夫婦 (左)。
- ・廃校を簡易宿所とカフェを兼ねた活動拠点に改修(左下)。
- ・集落の教会で「祈り暮らす村」の歴史や文化を解説(右下)。

#### ■受賞の内容

濱口さんは、里山の風景、緑の景観、美しい水辺など美しい田園風景を再生・保全し、自然と人との共生を日々の暮らしの中で実感できる人々のことを、「生涯現役・里山市民」と呼び、その仲間作りを進めている。

教育関係の仕事を経験した後、農業関係のNPO法人の 事務局長を7年務め、全国150か所余りの農村を回った。

団塊の世代が大量に定年退職を迎える時代を予感し、環境意識の高い世代や田舎暮らしにあこがれる人々を対象にした予備校づくりを構想。団塊世代の地域起業を支援する情報交換サロン「新現役の会」から紹介された半泊集落を訪問し、一目でこの地を気に入った。

半泊は、まるで「祈り暮らす村」だという。村に暮らす 高齢の漁師は、毎朝3時に起き、出航前には教会の祈りを 欠かさない。隠れキリシタンの伝統が今も日々の暮らしの 中に息づいている。祈りの象徴である教会と、暮らしの象 徴である「石積みの段々畑」が織りなす景観は、何百年も 弛まぬ信仰と暮らしの営みを続けてきた「生命力」や「人 間力」を強烈に発する文化的景観だ、と濱口さんは語る。

500メートル四方の空間に、山、川、田畑、海、住まい、教会等がコンパクトに配置されている様子を段々畑の上から鳥瞰した時、「かつて学んだパーマカルチャーを実践し、水、土、生き物が循環する田園ミュージアムを作ろう」と

思い立ち、廃校舎を拠点に集落そのものを田舎暮らしのス クールとすることを決意した。

さっそく任意組織「新現役の会&農援隊」を設立し、市から廃校舎を借り受けた。集落の空き家は既に朽ち果て、 人が住める状態ではなかったので、校舎に台所や風呂を設けて宿直室を住まいに改装し、2008年に移住した。

2010年、営業許可を取得して飲食店「半泊カフェ」と簡易宿所「半泊ステイ」を開業。改修資金は自己資金と県・国の助成金でまかなった。これまでに分校に訪問した人の数は、2008年から2012年までの5年間で2,299人。これらは、島内外の仲間たちと設立し、本人が代表を務める「企業組合五島列島ファンクラブ」として行っている。

2013年から旅行業の資格をもつ県内の離島航路会社と連携し、着地型旅行プログラム「島くらしスクール」を開始した。教会集落の文化的景観に触れ、住民との交流を通じて自然と共生した暮らし方や地域の魅力を体験でき、住民にとっても地域の誇りを取り戻す機会となっている。

来訪者の中には、島への移住を希望する人も多く、相談を受けることも多い。活動を開始してから19人から相談を受け、このうち8人が島への移住を実現した。

半泊を次世代に継承するためには、移住者の生活の糧を 生み出す仕事づくりが重要課題。集落史上初の観光産業に 活路を見出し、挑戦を続けていきたいと考えている。





隠れキリシタンの伝統が息づく離島の小さな集落で、廃校舎を自己資金も拠出してビジターセンター化し、年間1,000人の交流を達成している点、循環型地域システムや着地型旅行プログラムに挑戦する姿勢等が評価されました。「祈り暮らす村」というキャッチコピーも魅力的です。

### 第11回オーライ!ニッポン大賞の概要

#### ●趣 旨

都市と農山漁村の共生・対流に関する活動を行いながら、交流の拡大や地域活性化に寄与した団体・個人、及び都市と 農山漁村双方の生活や文化を楽しむライフスタイルを実践している個人を表彰し、その活動を広くPRすることで農山漁 村を舞台とした新たなライフスタイルの普及推進を図ることを目的としています。

#### ●表彰対象・審査基準

#### オーライ!ニッポン大賞

「都市側から人を送り出す活動」、「都市と農山漁村を結びつける活動」、「農山漁村の魅力を活かした受入側の活動」等を通じて、都市と農山漁村の共生・対流の拡大に寄与した実績や効果の高い団体又は個人。

#### (1) 表彰の種類

#### オーライ!ニッポン大賞グランプリ(内閣総理大臣賞)1件

※オーライ!ニッポン大賞と、連携表彰事業から推薦される「オーライ!ニッポン フレンドシップ大賞」の中から 1件が選ばれます。

オーライ!ニッポン大賞 3件程度 審査委員会長賞 数件

#### (2) 審査の基準

新規性	農山漁村地域を舞台とした新たなライフスタイルの提案、普及に関する取り組みであること。
独自性	地域固有の資源や個性を活かした、オリジナリティ豊かな取組みであること。
継続性	活動に多様な主体が参加・連携し、継続的な活動実績があること。
モデル性	他地域への応用や波及が期待できるモデル性の高い取組みであること。
効果性	農山漁村地域を活性化する効果があり、今後も効果が持続して発現すると見込まれること。

#### オーライ!ニッポン ライフスタイル賞

UJIターンにより都市から移住する等して農山漁村で魅力的かつ新たなライフスタイルを実践し、都市と農山漁村の 共生・対流に貢献している個人。

#### (1) 表彰の種類

ライフスタイル賞 数件

#### (2) 審査の基準

新規性	農山漁村を舞台とした新たなライフスタイルを実践していること。
独自性	個性的で魅力のある活動であること。
継続性	新たなライフスタイルの実践に継続性があること。
モデル性	新たなライフスタイルが他の人の参考となるものであること

#### オーライ!ニッポン フレンドシップ大賞・オーライ!ニッポン フレンドシップ賞

オーライ!ニッポン大賞の更なる普及を図るため、民間企業、民間団体、各省等が実施している表彰事業と連携し、オーライ!ニッポン大賞の趣旨に合致する案件の推薦枠を設けています。連携する事業主体から推薦された案件は「オーライ!ニッポン フレンドシップ賞」として表彰するとともに、その中から数件を「オーライ!ニッポン フレンドシップ大賞」として選定し、「オーライ!ニッポン大賞グランプリ」の候補とします。

今年度は、推薦が見送られました。

### 第11回オーライ!ニッポン大賞審査委員会の構成

会長 安田 喜憲 東北大学大学院環境科学研究科教授、オーライ!ニッポン会議副代表

井上 和衛 明治大学名誉教授

岡島 成行 公益社団法人日本環境教育フォーラム理事長

長岡 杏子 TBSテレビアナウンサー

中村 達朗 一般社団法人日本旅行業協会理事長

平野 啓子 語り部・かたりすと、オーライ!ニッポン会議副代表

元石 一雄 特定非営利活動法人水と緑の環境フォーラム常務理事

# 過去のオーライ!ニッポン大賞グランプリ

## 平成 15 年度 (第 1 回) **長野県飯田市**



周辺の町村、民間団体とともに、体験型観光専門の第3セクターである(㈱南信州観光公社を立ち上げ、400 戸以上の農家の協力を得て、年間220 校に及ぶ小・中・高校の修学旅行を受け入れている。また、全国に先駆けて取り組んでいる「ワーキングホリデー」は、地域で活躍するインストラクターが約300名も育ち、体験受入農家数も100戸になるなど、都市農村交流が総合的に地域活性化につながっている。



### 平成 16 年度 (第 2 回) **兵庫県八千代町** (現 多可町)



平成2年から新たな産業として交流産業の創出に着目し、滞在型市民農園(クラインガルテン)や宿泊交流施設、加工体験施設などの整備と併せ、主に神戸市や大阪市などから農林業体験ツアー等の都市住民の受入、地域の活性化を図っている。滞在型市民農園をはじめとした各種交流関連ビジネス起こしにより、多角的な都市農村交流を展開し、交流人口の増大、定住人口の増加を通じた、地域経済の活性化、地域の所得増大をもたらしている。



### 平成 17 年度 (第 3 回) **青森県南部町**



南部町名川地区のグリーン・ツーリズム活動の原点は、昭和61年に地域振興の起爆剤にと実施した「さくらんぼ狩り」から始まり、これをきっかけに「名川型交流」という農業体験、郷土料理、地域文化を活かした交流形態を確立。平成16年には、首都圏の中高年層と地元のコミュニケーションを結ぶモデル事業「バーチャルビレッジ『達者村』」を開村。活動実績20年をたってもなお、近隣町村と協力体制を図りながら取り組んでいる。



### 平成 18 年度 (第 4 回) NPO法人体験観光 ネットワーク松浦党・ 松浦体験型旅行協議会 (長崎県)

(現(一社)まつうら党 交流公社) ★ ★



長崎県北松浦半島地域を舞台に、体験者と 受け入れ側が互いに心温まる体験型観光「松 浦党の里ほんなもん体験」を展開。民間主 導のコーディネート組織である特定非営利 活動法人体験観光ネットワーク松浦党が ネットワークを形成し、広域的な取り組み が行われている。1日最大2000名が対応 可能な民家泊と農村・漁村を舞台とした豊 富な体験プログラムで修学旅行生を中心に 受け入れている。



# 平成 19 年度 (第 5 回) **幡多広域観光協議会** (高知県)



高知県西南部に位置する幡多地域の6市町村が連携し、平成7年に全国に先駆けて環境体験型教育旅行の受入組織として本協議会を設立。広域エリアの「総合受入窓口」として誘致から受入、精算まで一括して取り組んでいる。各地域の受入組織や個人をネットワーク化し、現在では100を超える体験プログラムを提供し、インストラクターも幡多地区全体で500名を超えるなど、充実した体制で受け入れている。



# (内閣総理大臣賞) 受賞者の概要

平成 20 年度 (第 6 回) NPO法人おぢか アイランドツーリズム 協会

(長崎県)



島のワンストップ窓口として、個人・団体問わず顧客の要望に応じた「おぢかの島旅」のコーディネート(オリジナルプログラム(工程表)の組立から体験料の収受まで)を一括して行っている。小値賀町から委託で、無人島・野崎島にある宿泊施設「野崎島自然学塾村」を通年営業し、売上の一部を「野島崎環境保全基金」として町に寄付する取組も始めている。



### 平成 21 年度 (第 7 回) 大地の芸術祭実行委 員会

(新潟県)



世界でも有数の豪雪地帯である越後妻有では、世界のアーティスト、文化人、研究者、都市のサポーターと住民が協働し、3年大祭「大地の芸術祭」を開催。760平方キロメートルの広大な大地に約200の現代アートが常設されている。この「大地の芸術祭の里」では、晴耕雨読、夏耕冬読の文化交流が四季を通して行われている。アーティストの手がけた交流施設は、地域の人々によって運営されている。



### 平成 22 年度 (第8回) ふるさと体験学習協会 (岩手県)



ふるさと体験学習協会は、久慈市内外の交流による地域活性化を目指して、教育旅行や体験活動等の受入を行っている。指導はすべて地元住民によるもので、山や海など豊かな自然を活かした体験や、昔ながらの知恵や技術、食文化の継承など様々な体験プログラムにより受入を行っている。この取り組みは、交流人口の拡大と受入者との交流によって地域経済の活性化と地域の元気づくりになっており、行政や関係団体とも連携した継続的な取組となっている。



### 平成 23 年度 (第 9 回) (財)新治農村公園 公社

(群馬県)

(現(一財)みなかみ農村公園公社)



(財)新治農村公園公社は、平成6年に設立され、旧新治村の地域づくり計画「全村公園化構想」に基づき、地域の主産業である農業と観光を結びつけた地域活性化として取り組んだ都市農村交流事業「たくみの里」を担っている団体で、「自然景観の保全と体験」をコンセプトに、体験施設を各集落に配置する分散型施設づくりを行い、広く農村空間の景観を守ると同時に集落全域に誘客する効果を生み出している。



### 平成24年度(第10回) **震災復興・地域支援** サークル ReRoots (宮城県)



県有数の農業地帯である仙台市若林区東部で、被災農家の生活再建に不可欠な農地とコミュニティの再生に取り組む。東日本大震災の甚大な津波被害から「復旧から復興へ、そして地域おこしへ」をコンセプトに、避難所で一緒だった学生や住民を中



心に設立。スタッフの9割を大学生が担い、全国から延べ20,000人のボランティアを受け入れ(H25年2月現在)。畑に埋もれたガレキを、農業機械を痛めないように手作業で除去。復興に向けては作付支援、農業機械貸出、市民農園やスタッフ自ら野菜づくりを行う農園の開設、復旧させた畑で農家が作った野菜を販売する店舗「りるまぁと」などに取り組む。



主催:オーライ!ニッポン会議(都市と農山漁村の共生・対流推進会議)、農林水産省

協賛:一般財団法人都市農山漁村交流活性化機構

後援:総務省、文部科学省、厚生労働省、経済産業省、国土交通省、環境省、

一般社団法人日本経済団体連合会、全国知事会、全国市長会、全国町村会

### オーライ!ニッポン大賞

〒101-0042 東京都千代田区神田東松下町45番地 神田金子ビル5階 TEL 03-4335-1985 FAX 03-5256-5211 ホームページ http://www.ohrai.jp E-mail ohrai@kouryu.or.jp

「オーライ!ニッポン会議」の事務局を構成する 22 団体

(一財) 地域活性化センター (公社) 全日本郷土芸能協会

(公財) 日本修学旅行協会 (公財) 全国修学旅行研究協会

(公社) 日本青年会議所

日本商工会議所

(公社) 日本観光振興協会

(一財) 地域開発研究所 (公社) 日本環境教育フォーラム (一財) 農村開発企画委員会

全国森林組合連合会

(一財) 漁港漁場漁村総合研究所 (一財) 都市農山漁村交流活性化機構

(公財) 伝統文化活性化国民協会

(財) 育てる会 全国商工会連合会

全国水土里ネット(全国土地改良事業団体連合会)

(公財)日本離島センター

(一財) 伝統的工芸品産業振興協会

(財) 日本青年館

(公財) パブリックヘルスリサーチセンター

(公財) 都市計画協会